

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除所長

平成 1 6 年度病害虫発生予報第 1 0 号について
平成 1 6 年度病害虫発生予報第 1 0 号を発表したので送付します。

平成 1 6 年度病害虫発生予報第 1 0 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
施設果菜類	コナジラミ類	並	2
冬春キュウリ	べと病	やや多	2
	うどんこ病	やや少	2
	褐斑病	やや多	2
	ミナミキイロアザミウマ	並	3
冬春ピーマン	斑点病	やや少	3
	うどんこ病	並	3
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	3
	ヒラズハナアザミウマ	やや少	3
	黒枯病（仮称）		3
冬春トマト	葉かび病	やや多	4
	灰色かび病	並	4
	ハモグリバエ類	やや少	4
	トマト黄化葉巻病（TYLCV）		4
冬春イチゴ	うどんこ病	やや少	4
	ハダニ類	少	5

作物の生育状況（1月中旬）

冬春キュウリの促成栽培、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴは収穫期で、冬春キュウリの半促成栽培は定植直後であった。

2月の気象予報

平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は平年並、降水量は平年並か平年より多い、日照時間は平年並か平年より少ないと予想されています。

（1か月予報 鹿児島地方気象台 1月21日発表）

発生予報の根拠および防除対策

施設果菜類

1 コナジラミ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬巡回調査で、冬春キュウリでの発生面積率31.3(平年9.0%)、百葉当たり虫数1.81頭(平年0.89頭)は平年並である。
- 2) 冬春トマト巡回調査で、発生面積率20.0%(平年43.1%)、百葉当たり虫数0.2頭(平年4.35頭)は平年より少ない。
- 3) 冬春ピーマンでは発生面積率20.0%(前月27.3%)、百葉当たり虫数2.7頭(前月0.8頭)で、先月と比べ発生面積は少なくなっているが、百葉当たり虫数は増加している。

[防除上の注意]

- 1) 高密度になると防除効果が低くなるので発生初期から防除する。
- 2) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- 3) 多発時には卵、幼虫、蛹、成虫が混じって生息し1回の防除では効果が低いので、5~7日置きに2~3回、かけむらがないように防除する。ただし、収穫前使用日数が7日以上のもので同一種類の農薬を続けて使用する場合は、7日以上開けて使用する。

冬春キュウリ

1. ベと病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 促成キュウリでは、1月中旬の発生面積率81.3%(平年70.0%)は平年よりやや多、発病葉率19.1%(平年17.7%)は平年並である。
- 2) 2月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は平年並、降水量は平年並が平年より多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- 2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

2. うどんこ病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率25.1%(平年42.8%)は平年よりやや少、発病葉率2.8%(平年5.6%)は平年より少ない。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- 3) 乾燥時に発生が多くなるので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3. 褐斑病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率50.0%(平年30.7%)、発病葉率7.9%(平年3.9%)は平年よりやや多い。
- 2) 2月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は平年並、降水量は平年並が平年より多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。
- 3) 下葉の発病葉はほ場外に持ち出し処分する。

4. ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率 6.3% (平年 14.3%)、葉当り虫数 0.08頭 (平年 0.26頭) は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度の内に防除する。

冬春ピーマン

1. 斑点病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内が高温多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- 2) 病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

2. うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率 40.0% (平年 49.4%) は平年並、発病葉率 1.7% (平年 4.5%) は平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。

3. ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率 50.0% (平年 28.9%) は平年よりやや多、10花当り寄生虫数 0.69頭 (平年 1.19頭) は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度の内に防除を徹底する。

4. ヒラズハナアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率 10.0% (平年 29.4%) は平年よりやや少、10花当り寄生虫数 1.02頭 (平年 5.54頭) は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度の内に防除を徹底する。

5. 黒枯病 (仮称)

[防除上の注意]

- 1) 1月中旬の巡回調査ほ場では発生面積 30.0% (前月 36.4%)、発病葉率 0.5% (前月 2.8%) である。
- 2) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- 3) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。

冬春トマト

1. 葉かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率 20.0% (平年 4.0%)、発病葉率 1.4% (平年 0.4%) は平年よりやや多い。
- 2) 2月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は平年並、降水量は平年並が平年より多いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2. 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花卉の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3. ハモグリバエ類 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので初期防除を徹底する。

4. トマト黄化葉巻病 (TYLCV)

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、シルバーリーフコナジラミ (媒介虫) の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 2) 施設内外の雑草はシルバーリーフコナジラミの寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- 3) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き去り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

冬春イチゴ

1. うどんこ病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率 16.7% (平年 29.8%) は平年並、発病葉率 0.4% (平年 2.2%) は平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 1) 葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。

3)発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きほ場内に放置しない。

2. ハダニ類 (少)

[予報の根拠]

1) 1月中旬の発生面積率8.3%(平年47.5%)、寄生株率0.7%(平年9.4%)は平年より少ない。

[防除上の注意]

- 1)発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- 2)株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- 3)薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤(商品名、マリックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。

- 3 発生量(程度)の区分

多	い	(高	い)	やや多いの外側	10%の度数の入る幅
やや多い		(やや高い)		平年並の外側	20%の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として	40%の度数の入る幅
やや少ない		(やや低い)		平年並の外側	20%の度数の入る幅
少ない		(低い)		やや少ないの外側	10%の度数の入る幅
(平年値は過去10年間の平均)					

- 4 予察情報の種類

病害虫防除所から発表する情報は次の5つです。

- 1)予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- 2)注意報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3)警報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4)特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
- 5)防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。(従来の防除速報にあたる)

お知らせ(<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病害虫防除所では、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を登録しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】 病害虫防除所 櫛間
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499
E-mail : kushima-yoshiyuki
@pref.miyazaki.lg.jp